隼人族の森を渡る風

創造の現場から　第22回

森の彫刻家　上床利秋

夢を感じる空間に

高齢者が多く集まりがちな病院だからこそ、もっと夢を感じさせる環境にしたい、という相談を受けたのが昨年九月ごろだった。霧島連山が雄大に見えるその麓に霧島杉安病院は位置している。たまたま新燃岳が爆発するという日にそのロータリーを飾る作品をどういうものにするかと発案し、それがいいと決まっていく行程は制作物語の始まりのようでもあった。

そのロマン性あるケンタウロスを現実の立体彫刻として生み出す様は、芸術を司る神がまるで自分を試しているかのような苦難の連続だった。これまで経験したことのない困難の山々を制覇してたどり着いた最後の関門は、作品の地山をブロンズで造らず、直接大岩に蹄で立たせるほうがよりリアルで魅力的に見えるというアイデアをどうやって実現させられるかということだった。

片足を上げているポーズなので実際三本の足で作品は立たせなければならない。蹄の下から前足に二本、後ろ足に一本ずつ四本のステンレスボルトを溶接して、石に穴をあけ直接突っ込んで石材用接着剤で固定するのがよい。蹄から出るボルトの長さは三十センチ、直径二センチとした。推定四トンはある巨大な岩に垂直に四つの穴をあけるのは簡単なようでそうではない。

コンプレッサーに繋いだハンドブレーカーという工具を利用して、永年の経験から培った「勘」と「工夫」と、そばで傾きを指摘し修正してくれるパートナーの「協力」であけるしかない。責任ある仕事を引き受けてくれる人は見つかるはずもなく、結局自分がやることに。巨岩に打撃を与えて穴をあける工具のパワーは凄まじい。その振動の迫力を両手で抑えて真下に掘り進めるわけだが、両腕と同時におなかで全体重を押し付けてしかも斜めにならないように心掛けながら汗まみれの大仕事だった。影のない真夏の陽射しの下でたった四つの穴を正確に予定通りにあけるのに、丸一日かかってしまった。

病院に実際に建てる前に、石材店で仮組みするというシミュレーションをやるのは大事な下準備。ケンタウロスのケイロンの雄姿が初めて岩の上に立った時、今回の大きな大きな仕事の山を越えた気がした。これで今自分が死んでもケンタウロスは立つと思った。

制作を依頼してくださった霧島杉安病院の関係の皆様には勿論のこと、制作助手や鋳造職人、石材店など協力してくださった多くの方々に感謝します。

日展審査員　第一幼児教育短期大学　教授

心棒づくり

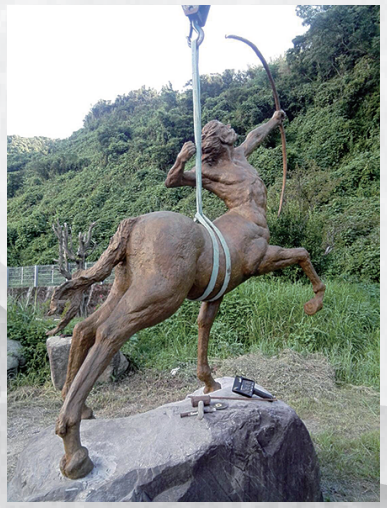
粘土が凍らないようにあらづけ

粘土原型完成

ブロンズはパーツごとに鋳造して溶接し組み上げる

大岩に穴をあけながら
熱中症と戦う

蹄から垂直にステンレスボルトを差し込む


無事に大岩の上に立った